労協連だより

古村　伸宏

人間が変われば、地球は変わる。豚インフルエンザの変異による新型インフルエンザについて、５月１日WHOは警戒レベルをフェーズ５に引き上げた。世界が今、生命の恐慌状態に直面している。それにしても、BSE・鳥インフルエンザ・豚インフルエンザと続く事態を、人間は真摯に受け止めるべきだと痛感する。先日読んだ「ハチはなぜ大量死したか」（ローワン・ジェイコブセン著、中里京子翻訳、文藝春秋）には、ミツバチの集合的な知がシステム的に崩壊していくという蜂群崩壊症候群（CCD：Colony Collapse Disorder）の広がりが克明に記された名著だった。原因が解明されていないCCDの主犯格として、人間が築き上げた経済、工業化された農業などが、地球上の生態系の動的平衡を崩している事実を受け止めつつ、人間社会に起こりつつある様も、同質の歩みに感じてしまうのは、私だけではないように感じる。CCDはミツバチに原因があるのではなく、工業製品のごとく扱われたミツバチのコミュニティが発狂し崩壊しているという推察は、人間の営みが与える影響が、人間のコミュニティの発狂と崩壊にもつながっていると思える。

世界的経済危機は、既に恐慌状態にあるという自覚は、「グローバル恐慌」（浜矩子著、岩波新書）を読んで更に深まった。経済とは何か、金融とは何か、資本主義とは何か、についての根源的な問い直しの次期であることは、疑う余地のない事実であろう。恐慌という経済状態を指す言葉は、既に経済を超え、地球生命体の恐れ慌てる状態を言い表している状況だ。

協同労働の協同組合法も、いよいよ議員連盟の議論に向け、政党内学習会が始まった。新型インフルエンザのパニックが落ち着くまで選挙どころではない、という声が出る中、通常国会は法制化の正念場となるだろう。これに併せ、総会で提起する政策づくりも正念場である。６月の全国総会では、「食と農と環境を生命と結ぶ仕事おこしコンテスト」を行う予定である。協同労働が、人間のコミュニティを労働現場から再生する取り組みとして進む上で、生活と地域からコミュニティを再生する取組みが求められる。それが「社会連帯委員会」である。組合員の市民性を高め、市民が協同労働に関わる接点に、この委員会はなってきている。社会変革の土台には、人間の知と文化の充実が欠かせない。コミュニティとは人間の集団知と、それを自覚し伝承していく文化の再生こそが、起こりつつある危機の叫びのように感じる。

「ハチはなぜ大量死したか」の原題は“Fruitless Fall”（実りなき秋）である。我々の事業・運動と法制化は、30周年を迎えるこの秋、実るだろうか。その実りは、我々のとっての実りではなく、社会再生の果実の実りであるべきだ。協同と連帯の文化という実りで、まっとうに人間らしく生き、働き、暮そう。